京都大学教授　平田清明編

経済原論

―市民社会の経済学批判―

青林書院新社

◆執筆者および執筆分担◆

平田　清明	（京都大学教授）	序　章
斉藤日出治	（金城学院大学短期大学部講師）	第1章
工藤　秀明	（京都大学研修員）	第2章
山田　鋭夫	（大阪市立大学助教授）	第3・4章
佐々木政憲	（岐阜大学工業短期大学部講師）	第5章
安孫子誠男	（千葉大学助教授）	第6章
伊藤　正純	（桃山学院短期大学助教授）	第7章第1～3節
若森　章孝	（関西大学助教授）	第7章第4～6節・第10章
篠田　武司	（立命館大学助教授）	第8章
佐藤　滋正	（尾道短期大学講師）	第9章
八木紀一郎	（岡山大学助教授）	終　章

（執筆順）

経済原論——市民社会の経済学批判——

昭和58年4月20日　初版第1刷印刷
昭和58年4月30日　初版第1刷発行

検印
廃止

編　者　平田清明
発行者　逸見俊吾

発行所　株式会社　青林書院新社
郵便番号　113
東京都文京区西片 1-3-17
電話 03（815）5897
振替口座 東京 1-16920

中央精版印刷／印刷・製本　落丁・乱丁本はお取り替えします。
3033—99930—3862
© 1983 K. Hirata

まえがき

若い研究者の皆さんと経済原論のテキストをひとつ作っていただけないか。こう依頼されてから実際の作業にはいるまでに、かなりのためらいと模索があった。

今日、経済原論のテキストとしては、どのようなものが必要なのか。いくつかのものが心に浮かぶ。すでに出版された少なからぬ類書が浮かんでくる。

だが私たちにとって、語り継ぐべき統一的主題はやはり、近代市民社会の経済学的自己認識ではなかろうか。

そう思い定めて作業を開始して以来、三年間。共同の研究作業が続けられた。その間、私たちの定めとった基本課題の展開にあたって、どの地平になにを語るか、どの命題のためになにを主要範疇とするか、が一つ一つ確定されねばならなかった。それは決してたやすくはない決断であった。経済学教師としての苦渋な選択であると同時に、専門研究者としての悩み多き実験でもあった。

そのようなものとしての共同試行の結果が本書である。だが同時にそれは、各執筆者がそれぞれの講義体験を問題ごとの理論的整序としてとりまとめたものでもある。実際の講義において語らねばならぬ現実的諸問題や研究状況については、紙幅の関係上、その多くを割愛せざるをえなかった。ただ、各問題圏ごとに、一ないし二の論争整理を行ない、そこに跡をとどめることにした。

本書の出来栄えについては、心もとないことも多いのであるが、幸いにして読者の問題関心の誘起に寄与することができれば、著者として望外の悦びである。

本書を世に送るにあたって、長く共同研究を組織して下さった、青林書院新社社長逸見俊吾氏および編集部員稲葉文彦氏に心から御礼申し上げたい。本書刊行の企画立案以来、同社にはひとかたならぬ御高配をいただいた。記して、謝意をここに表明する次第である。

執筆者を代表して

一九八三年二月二〇日

平田　清明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

まえがき

序　章　市民社会の経済学批判――その基礎視座をめぐって……三

一　近代市民社会の解剖学としての経済学（三）　二　近代市民社会の主体としての資本（四）　三　資本とは過程する価値である（七）　四　始源としての商品の措定（九）　五　本書の構成（一二）

第Ⅰ部　過程する資本価値の直接的生産過程

第一章　商品・貨幣・資本の形態発生――資本家的市民社会の物象化構造……一六

第一節　商品の二要因と労働の二者対抗性――市民的交通＝生産関係としての商品……一六

一　商品の二要因と価値の実体・大いさ（一六）　二　商品により上演される労働の二者対抗性（二〇）

《論　争》（二三）　《論　争》（二四）

第二節　価値形態または交換価値――貨幣と価値実体の発生学……二五

一　価値形態論の課題と方法（二五）　二　商品世界の表象＝上演様式の形態学的開示――相対的価値表現における価値実体の発生（二七）

第三節　商品の物神性と交換過程――近代市民社会の演劇的構造……三五
一　商品の物神性（三五）　二　交換過程（四一）
第四節　価値尺度・流通手段としての貨幣――商品の姿態変換における貨幣の機能……四四
一　価格形態形成としての価値尺度機能――商品の観念的姿態変換（四五）　二　流通手段機能――商品の現実的姿態変換（四八）　《論　争》（五四）
第五節　貨幣としての貨幣――貨幣物神と資本に生成する貨幣……五六
一　貨幣蓄蔵（五六）　二　支払手段（五八）　三　世界貨幣（六〇）
第六節　貨幣の資本への転化――市民的交通＝生産関係の資本家的交通＝生産関係への転化の形態学……六二
一　資本の一般的範式G―W―G′（六二）　二　一般的範式の矛盾（六五）　三　過程の自己増殖力としての労働力商品（六六）　《論　争》（七〇）
第二章　剰余価値の生産――過程する資本価値の生産力構造……七二
第一節　絶対的剰余価値の生産――資本家的生産過程の基礎範疇……七二
一　労働過程と価値増殖過程（七二）　二　不変資本・可変資本と剰余価値率（七八）　三　標準労働日をめぐる闘争（八〇）　四　剰余価値の率と量（八三）
第二節　相対的剰余価値の生産――社会的生産力の資本家的開発＝搾取……八四
一　相対的剰余価値の概念（八四）　二　相対的剰余価値生産の展開――機械制大工業と社会的質料変換（八八）　《論　争》（九七）

第三節　剰余価値と労賃――生産過程における資本関係の物神化……九九
一　絶対的および相対的剰余価値の生産（九九）　二　労働力の価値・価格の労賃への転化（一〇二）
第三章　資本の蓄積――資本関係の再生産と社会的生産力の展開……一〇六
第一節　剰余価値の資本への転化――資本家的生産関係の再生産……一〇六
一　再生産（一〇六）　二　単純再生産（一〇八）　三　蓄積と拡大再生産（一一二）
第二節　領有権法の転回――資本家的私的所有の発生論的批判……一一三
一　交換法則の転回（一一三）　二　領有権法の転回（一一六）　《論　争》（一一八）
第三節　蓄積規模の規定要因――価値面と質料面……一二一
一　剰余価値の資本と収入への分割比率（一二一）　二　剰余価値の絶対量と資本質料の膨張（一二三）
第四節　資本家的蓄積の一般法則――富の蓄積と貧困の蓄積……一二五
一　構成不変の蓄積（一二五）　二　構成高度化の蓄積（一二七）　三　相対的過剰人口の形成（一二九）
四　資本家的蓄積の一般法則（一三二）　《論　争》（一三三）
第四章　本源的蓄積――個体的所有の再建……一三七
第一節　本源的蓄積とは何か――蓄積と原蓄の関連……一三七
一　いわゆる本源的蓄積（一三七）　二　本源的蓄積と本来的蓄積（一三九）
第二節　本源的蓄積の諸契機と推進力――原蓄における古典と現代……一四〇
一　西欧的原蓄の諸契機（一四〇）　二　西欧的原蓄の推進力（一四三）　三　現代的原蓄の特徴（一四五）

第三節　資本家的蓄積の歴史的傾向――社会的個体の形成 ……一四七
一　個体的私的所有の否定（一四七）　二　個体的所有の再建（一四八）　《論　争》（一四九）

第II部　過程する資本価値の流通＝および再生産価程

第五章　資本の姿態変換とその循環――過程する資本価値の形態形成 ……一五四
第一節　貨幣資本循環――過程する資本価値の循環的メタモルフォーゼ ……一五六
一　第一段階G―W（貨幣資本の機能）（一五六）　二　第二段階P（生産資本の機能）（一五九）　三　第三段階W′―G′（商品資本の機能）（一六〇）　四　過程する資本価値の総循環（一六三）　五　貨幣資本循環の特殊性（一六四）
第二節　生産資本循環――過程する資本価値の再生産 ……一六六
一　貨幣資本物神の解体（一六六）　二　資本流通と生産資本の質料補塡（一六八）　三　収入流通と階級的人格の再生産（一六九）　四　循環＝蓄積過程と潜在的貨幣資本の形成（一七〇）
第三節　商品資本循環――過程する資本価値の社会的構造連関 ……一七二
一　始源W′の独自性（一七二）　二　資本＝および剰余価値流通と社会的代謝活動（一七三）　三　個体的資本の循環過程と社会的総資本の創出（一七五）
第四節　過程する資本価値の現実的循環――近代市民社会の主体としての資本 ……一七八
一　三循環の統一と総再生産過程（一七八）　二　社会的資本価値の自立化（一八〇）　《論　争》（一八二）

第五節　過程する資本価値の流通時間と流通費用――近代市民社会の時間意識……一八六
一　資本時間の敵対的諸分節＝連節（一八六）　二　流通費用（一八八）
第六章　資本の回転と再生産――資本家的交通＝再生産様式の構造形成……一九二
第一節　資本の回転過程――過程する資本価値の時間的動態……一九二
一　資本回転における形態規定と質料的連関（一九三）　二　社会的生産＝交通諸力と回転期間の動態（二〇〇）
三　回転する資本価値の増殖＝蓄積過程（二〇八）
第二節　流通＝再生産過程の実在的諸条件(1)――資本家的交通＝再生産様式の基礎構造……二二六
一　社会的総資本の自己編成――商品資本循環と二部門分割（二二六）　二　社会的価値・質料変換構造（二二九）
三　分配＝領有諸関係の再生産（二三八）
第三節　流通＝再生産過程の実在的諸条件(2)――蓄積＝拡大再生産の部門間構造……二三二
一　蓄積＝拡大再生産における始源（二三二）　二　連年的蓄積過程の表式的連関（二三五）　《論　争》（二三九）
第Ⅲ部　過程する資本価値の総姿態形成
第七章　利潤――総過程における社会的生産力の矛盾的展開……二四四
第一節　費用価格と利潤――収入形態論の基礎範疇……二四五
一　費用価格と利潤（二四五）　二　年利潤率を規定する諸要因（二四九）
第二節　平均的利潤と生産価格の形成――産業部門の形成と資本家的領有様式……二五三

一　資本の有機的構成と特殊的利潤率（二五三）　二　一般的利潤率ならびに生産価格の形成（二五六）
三　平均利潤の普遍性と費用価格の独自性（二五八）　《論　争》（二六〇）
第三節　生産価格と市場価値――市場競争の基礎構造……二六五
一　市場競争とその基礎概念（二六五）　二　市場価値の抽象的確定（二六七）　三　市場価値の現実的確定（二七一）　四　市場価値と市場生産価格（二七六）
第四節　一般的利潤率の傾向的低落――生産力発展の資本家的表現様式……二七九
一　社会的労働の生産力の発展と一般的利潤率の低落（二八〇）　二　一般的利潤率の低落と蓄積の総過程（二八一）　三　利潤率の低落を阻止する諸要因（二八二）
第五節　蓄積の総過程における社会的生産力の展開――資本の社会的力と私的力との衝突……二八四
一　利潤率の低落と蓄積の促進――内的矛盾の開示（二八四）　二　使用価値の蓄積と価値の蓄積（二八七）
三　資本の絶対的過剰生産（二九〇）　四　資本家的蓄積＝総過程の歴史的傾向（二九五）　《論　争》（二九五）
第六節　商業利潤と流通費――商人資本の自立化……二九九
一　商人資本の自立化（三〇〇）　二　総利潤の産業利潤と商業利潤とへの分裂――生産価格概念の再規定（三〇一）　三　流通費と生産性概念の転倒（三〇三）
第八章　利子――資本物神の完成と社会的生産力の展開……三〇六
第一節　利子うみ資本――過程する資本価値の無概念的自己完成……三〇六
一　利子うみ資本の独自的な流通形態（三〇六）　二　利子概念の生成とその物象性（三一一）　三　利潤の分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裂（三一二）　四　資本物神の完成（三一五）　《論　争》（三一六）
第二節　信用制度――虚構的世界の成立と社会的再生産……三一八
一　商業信用（三一九）　二　銀行信用（三二二）　三　擬制資本（三二六）
第三節　貨幣資本と現実資本――その矛盾的・対立的連関……三二九
一　貨幣資本の形成と現実資本の蓄積（三三〇）　二　産業循環における貨幣資本と現実資本（三三二）
三　貨幣資本と現実資本の対立的連関（三三三）
第四節　信用の歴史的役割――社会的個体の潜勢的形成……三三四
一　信用の二面的性格（三三四）　二　信用主義と重金主義（三三五）　三　社会的個体の潜勢的形成（三三六）
第九章　地代――土地物神の成立と資本－土地所有関係の展開……三四一
第一節　資本家的地代――土地所有の経済的実現形態……三四一
第二節　差額地代Ⅰ――土地豊度の差と超過利潤の地代への転化……三四四
一　差額地代の概説（三四四）　二　差額地代Ⅰの発生メカニズム（三四六）　三　差額地代表の諸モメント
（三四七）　《論　争》（三五一）
第三節　差額地代Ⅱ――土地への資本と集積と差額地代原理の動揺……三五三
一　差額地代Ⅱの概説（三五三）　二　差額地代Ⅱの独自性（三五五）　三　差額地代Ⅱの機制（三五七）
四　最劣等地に生ずる地代（三六一）
第四節　絶対地代――地代形態の自立化と土地所有の領有力能……三六四

第五節　土地価格――地代源泉の神秘化と私的土地所有の廃絶……三六九
第一〇章　諸収入とその諸源泉――理論的階級意識と社会的個体の形成……三七四
第一節　経済学的三位一体範式――労働過程の物神創造過程への転化……三七四
一　三大階級の収入源泉（三七四）　二　経済学的三位一体の諸範式（三七六）　三　労働過程の物神創造過程への転化（三七九）
第二節　再生産過程の謎と競争の仮象――分配過程と再生産過程……三八一
一　再生産過程の謎と社会的資本物神の解体（三八一）　二　競争の仮象――虚構的世界の普遍的成立（三八四）
第三節　分配＝および生産諸関係の危機――労働日の短縮と社会的個体の形成……三八九
第四節　諸階級――理論的階級意識と個体的所有の再建……三九二
終　章　経済学史における資本理論……三九六
一　資本概念の三契機（三九六）　二　古典派の資本概念（三九八）　三　古典派の資本概念の解体（四〇一）
四　新古典派の資本理論の構造（四〇四）　五　資本理論の課題（四一〇）

さくいん

経済原論——市民社会の経済学批判——

序　章　市民社会の経済学批判——その基礎視座をめぐって

一　近代市民社会の解剖学としての経済学

人類史において私的所有が——ヘーゲル『法哲学』の指摘するように——人間による社会形成の法原理となって以来、諸般の財は、その私的所有者たちによって商品として相互に売買されることになった。人間の必要とする財は、その生産と流通とが分離するものとなり、貨幣によって過程的に統一されるものとなった。貨幣は諸商品の交換用具として流通過程を媒介することによって、逆に流通の支配者として君臨することとなった。そこに、貨幣を君主とする商品世界が成立していくことになった。このことは、二一世紀をむかえつつある現代においても変わらない。

近世初頭、財の流通においてもその生産においても、資本として機能する貨幣が主人公となった。そのばあい、資本とは自己増殖する価値として、ごく日常的に了解されていた。自己の本源的価値以上の増加（＝剰余）価値を自己にもたらす価値のことである。そして、ここに価値とは、なによりもまず商品交換において相手方の商品を「購買し支配する力」（A・スミス）として了解されるのであった。

ひとは、貨幣が貸し付けられるとき、それが自己増殖する価値として機能することを、つまり資本の存在を、古くから知っていた。しかし、そのようなものとしての資本が、社会の主人公として人間生活をすみずみまで領導することを、ひとが自己の眼前に、また自己の体内に、みるにいたったのは、この資本が商品としての財の流通過程と生産

過程の双方を掌握するにいたって以降のことである。このとき以来、こんにちにいたるまで財の産出と享受という永遠の人間的必然事が商品の生産・流通・消費という社会的形態をおびた諸過程に分断され、それら諸過程の形態運動として実在することになった。

資本は地上に存在するあらゆる生産諸要因を商品化することによって、自己の存立の必要とする前提諸条件を不断に再生産するのであり、商品の生産過程と流通過程のたえざる反復によって自己自身を再生産し、そこに独自な経済的社会形態を出現させる。近代市民社会とよばれる社会がそこに生成・展開するのであった。

それは人類史上はじめて政治的国家との区別を完成させた社会そのものの出現であり、この社会が土台となってその上に諸種のバイアスをともなう社会的意識形態を成立させるのであった。この上部構造の発生基盤たる社会は、それ自体が社会的経済構造をなすものであって、この両者は一定の連関において経済的社会形成（体）をなすものとなった。

ここに人間による社会形成が、土台と上部構造の緊張関係の総体として展開されることになり、この意味での社会の創出とその自己発見こそ、人間にとって歴史の再発見なのであった。このゆえに、近代市民社会の解剖学たる経済学は、社会形成の諸分節を批判的に認識しその過程的統一を統覚する学である。つまり歴史認識の学なのである。

二　近代市民社会の主体としての資本

自己増殖する価値として資本は、利潤とか利子という名の増加価値を収入としてもたらしてくる。なぜそのようなものをもたらすことができるのか。その理由は、資本とは何かという設問とともに種々多様でありうる。

自己増殖する価値だという点で万人が平明に了解する資本なるもの（ダス・カピタール）も、一歩踏みこんでみれば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com